

第六十四回 日本伝統工芸展 こども鑑賞会

実施日 平成三十年

一月二十六日（金）

会場 仙台三越本館七階催事ホール

—日本の工芸美術の粋「日本伝統工芸展」に、瑞々しい感性の子供たちを招待し、「伝統工芸」の核心ともいべき「技と心」を曇りのない眼で見極めてもらおう、という子ども鑑賞会も回を重ねて今年で十九回。今年度は、午前の部に仙台市立原町小学校五年七十五名、午後の部に仙台市立館小学校五年八十一名を会場に迎えました。

講師を担当していただいたのは、陶芸 和田的、染職 藍田愛郎、漆芸 野口洋子、金工 家出隆浩、木工 磯飛節子、人形 青野洋、諸

工芸 安達征良、の各氏。

恒例の全体オリエンテーションの後、事前に配布されていた六十四回展の図録を参考に、子どもたちが選んだ各部門に分かれ、活動に移りました。

今回参加の子ども達は、四学年時に「地場産業としての工芸」を学ぶ授業を受けているのですが、伝統工芸の作品や作家に直接触れるのは両校とも初めての事で、各部門とも静かなスタートとなりました。

事前に資料が配られているとはいえ、そこは小学五年生、技法の基礎を理解するのに重要な「化学」や、文化的背景を想像するのに欠かせない「歴史」などもまだ授業で十分に習っていないため、講師の先生方は「わかりやすさ重視」と、手を変え品を変え奮闘しておられました。

先入観無く陳列作品をくると見て回る姿は「いまどきの子」そのものですが、作品に何かを感じ、身乗り出して目を凝らす姿もあちこちで見られました。

体験学習は、目の輝きがぐっと強まり、日ごろ触れる機会のない素材や技法、道具に興味津々の様子。時間を忘れて没頭する姿に子供たちの可能性と未来を感じ、少し頼もしく思いました。

十一歳の子どもの心に、どこまで迫れたのかはまだ判りませんが、彼らの純粹で鋭く、ある意味残酷で強い言葉を私たちは胸に刻み、現代に生きる工芸作家として、彼らの問いに自信をもって答えるために、常に意識を高く保たねばならぬ、と思うのでした。

こども鑑賞会担当 吉田 宏信 記

撮影 志賀 暁吉

陶 芸 和 田 的

二〇一八年一月二十六日、仙台三越にてこども鑑賞会が開催されました。日本伝統工芸展の巡回日程と重なるよう設けられた鑑賞会も二〇回を数え、人気の高い恒例行事に成長しているとのことでした。

制作中心の毎日を送っている私にとって、こども達に説明することは経験がなく不安でしたが、事前に『伝統工芸ってなに？』と日本伝統工芸展の図録を予習のため目を通して下さっているとのことでしたので、その本に沿って説明しようと考えました。当日は、午前が説明時間七〇分と自由鑑賞の時間が二〇分、午後が

五〇分と一五分、どちらも長い時間が設けられており、本に加え私の専門である磁器についてより詳しい説明と実演を行うことにしました。

当初、話に集中してくれるのか心配でしたが、しっかりと話に耳を傾け、時折メモを取る姿がとても印象的でした。一通り制作工程などを紹介した後、磁器土の原料である天草陶石の原石に触れてもらい、石が粘土になるまでの工程をタブレット端末の画像で紹介しました。今の子ども達にとってタブレット端末は全く抵抗感がなく、その場では実演でき



ない轆轤の工程などをビデオ撮影し、紹介することもできたのではと反省することも多々ありました。一

番の盛り上がりは実際に粘土に触れ、石膏の型を粘土に押し重ね文様を作り上げてゆく工程を体験しても

らった時で、磁器土に初めて触れたこども達は、「ツルツルしてるー」、「手が白くなるー」、「つめたーい」、

などそれぞれの感想を口にしていました。彫りによる作品の実演も行いました。シャツシャツと削る音が印象的だったようです。実演中に、「削った粘土は捨てるんですか」と

質問がありました。大切な材料なので水に戻し再利用することなども伝えました。自由鑑賞の際には数点の作品を例に挙げ、土や窯焚きの違いを解説し、陶器なのか磁器なのかなど問題を出しつつ、楽しみながら興味を持ってもらえるよう一緒に作品を見て回りました。

午前の部は私も要領がつかめず、時間を持て余してしまいました。こども達が積極的に質問をしてくれたお陰で無事に終えることができました。伝統工芸に興味を持って欲しいと思いつつ、説明をしましたが、最後にまた来年も見にきたいと声を

かけてくれた子がいたことに安堵し、こども鑑賞会を終えました。

染織

藍田愛郎

今回、初めての子ども鑑賞会で、仙台に降り立つのも初めてでした。緊張しながら道具類の入ったキャリーバッグを引き、会場入りし打ち合わせをしました。

雪が舞う中、当日を迎え、午前十七名、午後十二名を担当しました。事前に知らされていたものの、小学五年生に染織の魅力をどう伝えられるか自分なりに考え、まず着物を着てもらう、今日着てきた着物の柄や思い出の話をしながら「今までに着物を着たことがある人」と質問したところ、半数以上が「七五三で」と答えました。浴衣を着て楽しんでる子もいて嬉しくなりました。

少し場が和んだ所で、本題の江戸小紋の話に移りました。まず江戸小紋には欠かせない型紙が出来るまでを、実際職人さんが使っていた道具を手にとってもらいながら説明しました。そして型付けの実演をし、糊を置いて型紙を上げると「ワーツ」



純粹で真剣に耳を傾けてくれ、質問も沢山してくれて、とても有意義な時間を過ごさせてもらいました。一人でも多くの子が工芸に興味を持ち、次の時代を創っていつてくれることを願います。また、着物を着ているんな場所に出掛け、楽しんでもらいたいです。

漆芸

野口洋子

初めての仙台で、初めてのこども鑑賞会。不安の種は膨らむばかりでしたが先輩方の助言や会報のお陰でようやく準備も整い当日を迎える事ができました。

子供達は予め図録と『伝統工芸ってなに?』の本で予習しているとの事。準備した道具類は、本の内容に添ってテーブルに並べ子供達を迎えます。今回の五年生は、午前七名午後十二名の計十九名。挨拶の後尋ねてみると、漆のモノを見たり使ったりした事のある人は一人もいませんでした。子供達にとって漆との初め



ての出会いの場となるこの鑑賞会が、漆と親しむきっかけとなつてくれるようお願いばかりです。

まずは、先入観のない眼で各々自由に観て回り、大好きな一点を選んで作品名を葉に書き留めてもらいます。(葉は出会いの記念にと思ひ用意しました) 全員が戻るのを待って第一印象を聞いてみると「ピカピカしてた。模様がキラキラしてる。本で見るより艶がすごい！ツルツルで触ってみたい。」等と口々に感想が返ってきます。漆の艶の美しさに子供達の眼も魅了された様でした。

続いて漆の話に入ります。質問を投げかけながら進めましたが、皆良く答えてくれて予習がしっかりなされている事に感心しました。十五年以上育てた漆の木から採れる漆の量も「二百グラム！」とすぐに答えられる程。しかしここで二百グラム入りの生漆を見せると「エー！コレダケー？」と皆その量の少なさに驚きを隠せず、同時に漆液の貴重さも実感できた様子でした。

次に漆器の代表選手、漆碗の工程見本を示しながら下地や塗り、研ぎ等の大切さを解いた後、中塗の子供碗を各々に手渡し、漆器の肌触りや手に取って使う感覚も味わってもらいました。乾漆の工程見本で、和紙や麻布からも器ができる事を教え、完成品の盃や鉢なども丁寧に手に取って鑑賞しました。

蒔絵や螺鈿の技法は手板で説明し、道具類や材料(金銀粉、色粉、厚貝、薄貝、鼈甲)なども全て触って確かめられるよう心がけました。話の最後に本には載っていない私の専門である箔絵の話をし加え、簡単な遊びで締めくくりました。黒い紙を敷き、竹の振り筒に銀箔を入れ、たたき筆で中をかき回すとフワ

フワキラキラと砂子が舞い落ちます。皆でキラキラ舞い散る砂子蒔きを楽しみ、鑑賞会を終えました。

金 工 家出隆浩

「こども鑑賞会」の講師の依頼を頂いた時、こういった経験が無く、さてどうしたものかと途方に暮れましたが、会報や先輩方の話で方向が見えてきました。

子供達は(子供達に限りませんが)きつと金属は硬いだけのものだと思っているに違いない、その固定観念を覆してやろうと思ひ付きました。鍛金家は金属が柔らかい時を狙って仕事をすす訳ですがその事を子供達に少しでも伝われば良いなと思ひ今回の狙いにしました。

午前は九人、午後は十一人、小学五年生の子供達、金属にどんなイメージが有るかと聞くと「硬い」「冷たい」等々、やはりね。そこで先ずは硬い銅線を曲げてもらい、次に鈍した柔らかい銅線を曲げてもらうと皆一様にそのフニャフニャ具合に驚いた顔。これが同じ銅線であるとは思えないのでしょうか。次にどんどん

曲げるように指示すると今度はみるみる硬くなつていくのに、また驚いたようでした。これで掴みは十分。金属は硬い状態で身の回りに有るの硬いものだと思ひ込んでいただけということ、金工家はこの様な性質を利用して金属を成形し作品にしていくことを伝えると、実感と共に少しは理解してもらえたのではないかと思います。

その後金槌で槌目を付けて見せたり、鑿で彫って見せたり、銅板をハサミで切つて見せたりと実演を交えながら鑄金、鍛金、彫金の技術的な



話を説明してみました。ところが、どうもピンと来ない様子。そこで十円玉を磨いてみようと思習に移ると、くすんだ銅がみるみる光り輝く様にもう夢中、研磨剤のお代わりをおねだりされ、作品鑑賞の時間が来ても手が止まりません。強制終了させ次へと移りました。作品鑑賞は会場を巡りながら説明しようとしてもなかなか集まらずほぼ無理な状態、途中で自由鑑賞、最後に質問ということにして会を終えました。

今回の鑑賞会を終えて思う事は、小難しい説明より素材体験が重要なことという事。

普段スマホやゲーム機のボタンを押してバーチャルな世界に浸っているだろう子供達にリアルな体験として印象に残ってくれればいいな、と思いつつ帰路につきました。

木竹工

磯飛節子

子ども鑑賞会の講師は第六十回展と今回で二度目でした。前回は思い出したり、鑑賞会の目的を考えて準備を進めました。

午前、午後の二校とも事前に配ら



れた「伝統工芸ってなに？」で予習がされていました。教科書として進めようと考えていたので、スムーズに入れました。

実際に手で触れた感触や、制作方法や、材料によっての重さの違い、細部も見られるように小品を三点用意しました。その際、作品を箱から出し、終わりに布や紙で包んで箱に収めるのを見せたところ、作品を大切に扱う事にも気づいてくれたようでした。

竹工芸においての材料づくりの基本となる、板割り、桎割りの違いを説明した後、予め割り込みを入れた

竹材をそれぞれに手で割いてみて、竹の特性を感じて貰えたようでした。手で割いた材と仕上がっている材の違いに「ツルツル、ピカピカ」と驚いた様子でした。

次に、一つの六つ目編みの籠に、巾違いの材料を一人一本ずつ自由に刺し通してみました。創る楽しさを手と目で学べたかなと思います。

会場の作品鑑賞をしながら「桎割材を使った作品はどれでしょう？」と問題を出すと、皆真剣に考えて答えてくれました。中には「あの作品は竹の特性をとっても活かしていますね」との感想や「伝統工芸家の人たちの給料はいくらですか？」という質問もありました。

午前七十分、午後五十分、という時間の違いは内容の準備の都合上も、統一できないものだろうか？と思います。

人形

青野洋

この鑑賞会に参加する子供達の多くは、今回初めて伝統工芸展の作品を見るのではないかと思われま

まず、何の先入観も無く見て欲

しいので、子供達だけで一巡してきてもらいました。

それから、テキストを見たり、陳列作品を例にとったりして、各分野の人形について説明し、更に私の分野の木芯桐塑紙貼の技法を少し詳しく説明しました。

実際に桐塑の材料や、各種の和紙を見せて、触ってもらいました。特に和紙の美しさや、手触りは体験したことのないものだったようです。

伝統工芸の人形は、手にとって遊ぶ人形ではないので、教室用に触れても良い小品を用意しました。

仕上げの過程が解るように、下地の部分、胡粉をかけた部分、紙貼りをした部分がある状態で、貼り残しであるところに紙を貼ってみせました。薄い紙がすつと吸いつくように貼られ、色調が変わると、子供達の間も一気に引き付けられたようです。

そして「この作品に題名をつけるとしたら、どんな題にする」と問題を出しました。この作品は、子供達と同じ年頃の女の子が、右手に花一輪、左手にリボンを掛けた小さな箱を持ったものです。

子供達は口々に「プレゼントをあげるところ」とか、なかには「プレ



実習はあくまで鑑賞を深める為に行いましたが、子供達にとって和紙をあつかう体験はとても楽しかったようです。

諸工芸

安達征良

「見るだけにしてね！さわらないですよ！」作品展の会場にいと小さい子供を連れただお客様からよく聞くセリフである。

今回、子供鑑賞会を担当するにあたって、予めワークシヨップにならないようにとの注意がありましたので、どのように進めたらよいものかと考えている時、このセリフが、ふと頭に浮かんできました。普段「触ってはならぬ」と言われているものを子供達に触ってもらい、視覚だけではなく、触覚でもガラス工芸を感じてもらえたらと、ガラスの原料、色ガラス・カット工程の見本、道具、作品などを準備して当日を迎えました。子供達には、はじめに展示作品の前で、諸工芸には、さまざまな素材を使ったものがあることを話した後、切りガラスについてクイズを交えながら話を進めました。



先ず、ガラスの原料である珪石をみんなに触ってもらいながら、ガラスは、何から出来ているのか？色ガラスは、どのようにして作るのか？など素材の話をした後、色ガラスは、厚みによって濃淡が出るのを見てもらいました。子供たちは、見本の色ガラス片を何度も回転させながら、ええ〜！と不思議そうに覗いていました。次に、カットの道具を触ってもらい、刃の表面と工程見本のカット面を触り比べてもらいました。

ここまで、説明の話が続きました

ので、次に少し手を動かしてもらおうと「おはじき」の底を粗ざりしたモノを配り、サンドペーパーで擦ってもらって、カットガラスの工程を少し体験してもらいました。少しずつつやが出てくると子供たちは、夢中でガラスを擦って、この日、一番の目の輝きを見せてくれたように思えます。

最後に切り作品を触ってもらいました。恐る恐る触った手から、ツルツルとした表面、凸凹した模様、ズツシリとした重さ、など「おお〜」という声から感じてもらえたかな？と思っています。

私は、子供鑑賞会を担当させていただき、その子供たちの表情を見て「人間は、そもそも素材が好きなのだろう」と感じました。

また、泥遊びをしていた子供が、成長すると泥団子を作り始めるように、子供は成長とともに素材を使って形づくり始める。工芸家は、その延長上にいるのだろうか？そんなことを考えていました。

今回、参加してくれた子供たちには、経験としての記憶だけではなく、少しでも知識にってもらえたら嬉しく思います。

ゼントを渡す為待ち伏せをしているところ」という意見もあって「誰に？」と訊くと「ぼくに」と答えて笑いをとっていました。

作品を見ることに子供達の気持ちが向いてきたところで、また展示作品を見に行ってもらい、今度は感想を聞かせてもらうことにしました。

大分気持ちほぐれたようで、この作品のここが良いと思う、ここが好き、あるいはこの作品は嫌い、とか、素直な感想を聞かせてくれました。

最後の十五分は、自由鑑賞の時間になっていたので、それまでの時間を和紙貼の実習に当てました。